

アイデンティティと「見えないもの」

—レバノンの事例による論点導出のための覚え書き

池田 昭 光*

1. はじめに

本論文は、筆者がレバノンにおけるフィールドワークで得た事例をもとに、それらが一見するとアイデンティティやエスニシティといった用語に関連するよう見えながらも、実際にはこうした用語に収まりきれない膨らみを持つ点を指摘することを目的としている。ここで取り上げる事例は、アイデンティティと隣り合っているが、むしろアイデンティティがそこから醸成されてくる母胎のような位置づけにあるのではないか、というのがここでの見通しである。本論文は、あくまで覚え書きとして、その見通しを得るための論点を導出することまでを目的としており、ゆえに、議論として不十分な側面があることは承知している。しかし、今後のさらなる考察のための土台作りを行いたい。なお、本論文の第2節では、筆者の博士論文（未刊行）[池田2016]第2章の一部を、加筆訂正の上で用いていることをお断りしておく。

議論の構成のために、最初は板垣雄三によるアイデンティティの議論を参照する。この議論は中東地域研究で非常によく知られたものであるため、まずは参照すべきものである。板垣の議論を紹介し、その問題点を指摘したのち、今度は、黒木英充による議論を参照する。黒木は板垣の問題点を

*専修大学文学部兼任講師

補う議論を展開している。

板垣から黒木への議論の展開を通して、中東地域研究において、アイデンティティを取り巻く日常性へと視野が広げられている点が浮かび上がる。この点を踏まえうたうえで、本論文が意図しているのは、筆者自身のフィールドにおけるアイデンティティの様相それ自体を語るのではなく、アイデンティティを生み出す当の住民自身がどのような存在であるかという、人間観の更新と言ってよいだろう。

2. 「アイデンティティ複合」における「切り換え」

中東地域には、宗教、民族、言語といった社会文化的属性における多様性が見られるとともに、そのような多様な属性を、個々人がその場その場の状況に応じて切り替えるという複雑な社会性が見出されることが指摘されている。中東諸社会の人びとは、カテゴリーに所属する存在というよりは、むしろ様々なカテゴリーを、操作的な側面を伴いつつ、身にまもっては外し、身にまもっては外していく存在であると考えられている。このようなイメージを明確な仕方で述べたのが板垣雄三である。

板垣のそもそもの問題意識には、エスニシティ論を通じた、個人—民族—国家の関係を批判的に検討するという性格がある¹。板垣の立場に立てば、1970年代から80年代にかけてみられた紛争とは、「近代 nation-state の枠組」の「行詰まり」であり、「国家の枠組みを内に向かっても外に向かっても解体し、解消し、組み換えていくような集団形成の、また集団意識形成の急速な進行・展開が、こうした問題状況をもっとも鋭い形でつきつけている」[板垣1992:34] のであり、国家の揺らぎを象徴する現象がエスニシティという語によって表現されるということになる。したがって、エスニシティは、本来は静態的なカテゴリではなく、「よりダイナミックな政治化プロセスの研究、広義の紛争研究にならざるを得ない・・・それ

は、民族の問題であるよりは、はるかに動的な民族形成の問題であり、むしろ民族獲得の問題というべきもの」[板垣1992:35]なのである。そのため、一国内の分節化された集団カテゴリとしてエスニシティの概念を用いることに対しては、たとえば「アフガニスタンやイランを『多民族国家』と見なすのは簡単」であり、あるいは「クルド人やベルベル人の動向や社会的緊張を『少数民族』問題として検討することも従来ありきたりの手法」[板垣1992:34]にすぎないと、冷淡な視線が向けられる。板垣にとっては、集団を前提としたマッピングのようにして、単にイランを、ペルシア人、クルド人、アラブ人等々からなる「多民族国家」とみなすだけでは静態的な把握にとどまるのであり、組み換えのダイナミズムという肝心の点が見えないままとなってしまうのである。

したがって板垣は、自らのアプローチは「明らかに『プロセス』的捉え方に属し、『下からの』定義に属するもの」[板垣1992:33]であると表現している。この、「下からの定義」を具体化したものが「アイデンティティ複合」の議論であると位置づけられる。これは、ある個人が、自己に関わる様々な文化的、社会的、政治的属性を、その都度その都度切り換えながら生の局面を切り開こうとする営為である。

その場合に関連してくる属性については、板垣は複数の種類を想定している。例えば宗教の場合は、イスラーム教の宗教共同体観念が持ち出されている。板垣の説明をまとめると、次のようになる。神は人間を救済するために n 人の預言者を遣わし、 n 個の言語を通じた n 回の啓示によって n 個の集団が生み出されることになる。その中のひとつがたとえばユダヤ教徒の共同体であり、他のひとつがたとえばキリスト教徒の共同体である。また、最終値としての n がイスラーム教徒の共同体ということになる。その n 個の集団が相互に「安全と正義という原則に基づいてシンピオーシス[共生]の関係を求めるべきだ」という考え方となる [板垣1992:41]。

また、別の例として持ち出されているのは家族である。これは人類学で

言う分節リネージと共通する側面がある。すなわち、ある個人が父系の出自をたどることで、自らを n 代前の祖先に発する集団の一員として位置づける、というものである。最終的にこの系譜は人類の始祖アダム（アダム）までたどり着くものが想定されている。[板垣1992：42-43]

このような複数のモデルの間で自己の位置づけを組み換える際の「組み換え」に着目した場合、どのような視野が開けるのかについて、板垣は次のようなモデルケースを挙げている。具体的に書かれているため、少し長いが引用しよう。

イランのフーズターン地方の住民の場合をとり上げよう。イラン南西部のフーズターンは、アラビスターンとも言い換えられるように、その住民はアラビア語で生活する人が多いので、アラブである、ともみられる。しかし、その人びとは長い間イラン国家の中に包摂されてきて、イラン人であるという肩書きをもつ。しかし、またその同じ人が、自分は十二イマーム派のイスラム教徒だ、シーア派のイスラム教徒だ、と主張することもできる。もし、自分がシーア派の中の十二イマーム派のイスラム教徒だとすると、その人が属する世界は、イランだけでなく、イラク、サウジアラビアなどペルシア湾岸地域、レバノン南部など十二イマーム派のイスラム教徒の住む世界へとひろがり、そういう地域に属する一人としての自分ということになる。そしてまた、十二イマーム派などと限定せず、自分はイスラム教徒だという主張もできるのである。そうすると、彼または彼女の世界は一挙に拡大する。

[板垣1992：220；傍点付加]

イランにおけるアラビア語話者は、アラブとして自己規定もできるし、イラン人としても自己規定ができる。他方、十二イマーム派のイスラム教徒であると自己を見なすならば、他の十二イマーム派イスラム教徒の住

む世界が開け、単にイスラーム教徒だとみなすのであれば、全イスラーム世界へと世界が開ける。このような説明がなされている。

板垣の表現の力点は、このように、自己規定の仕方により、その都度、件の個人に対しての世界の「広がり」が変わるという点にある。

「私」は多方向にさまざまな^レ拡がりへの可能性をもつ異なった「自分」をもっている。これは、一人ひとりが、肩書きの異なる多数の名刺をもっていて、ある状況の中で特定の相手に対してどの名刺を出したらよいかと選び分けている、ということに譬えられるであろう。こうしたアイデンティティ選択がある以上、民族主義、民族意識といっても、それはひと筋縄ではいかないことになる。

[板垣1992：222；傍点付加]

繰り返えしになるが、板垣は、近代国家の揺らぎをもたらすものとしてエスニシティをとらえている。そのため、こうしたモデル化や具体例を持ち出すことにより、中東においては「国家というのは、どうにも収まりの悪い、落ち着き場所のない存在であり、機構である」[板垣1992：43]という点について、注意を喚起している。

本論文はエスニシティを直接的に問題とするものではないため、この領域で板垣の議論の妥当性について評価を加えるものではない。むしろ、何度か登場してきた「ひろがり」「拡がり」という表現に着目したい。なぜなら、こうした表現の裏側には、アイデンティティ選択の切り換えによる「ひろがり」の変化をそもそも意味あるものとしている何らかの仕組みがあるように思われるからだ。つまり、切り換えること自体は、中東に限らず、あらゆる社会の人びとにとって潜在的に可能なものと思われるが、切り換えたことによってそこからどのような他者との関係が生み出されるのかについては、個々の社会により異なることが想定される。しかしながら

板垣の議論は、切り換えについて強調するが、切り換えたことによって生み出される「ひろがり」が社会や文化のなかでどのように現象するのか、ということへの配慮に乏しいという問題を抱えている。

3. 「地域システム」とアイデンティティ

黒木英充は、板垣の「複合アイデンティティ」の議論を踏まえつつ、板垣が充分には提示することのできなかった、個別具体的な脈絡の中での「ひろがり」がいかなるものかを描き出すことに成功している。

「中東の地域システムとアイデンティティ」[黒木1993]と題する論考の中で、黒木は19世紀前半、オスマン帝国に生きたある一人のペイルート出身のキリスト教徒（ギリシア正教徒）商人アスアド・ハイヤート（1811－65）の例を取りあげている。

ハイヤートは、幼少のころから商売と語学に関心を持った。この二つは密接に関連している。なぜなら、西欧諸国との貿易関係を強めていたオスマン帝国には様々な特権を得たヨーロッパ商人が到来しており、語学の知識は商売を円滑に進める上でのこのうえない道具となったからである。事実、ハイヤートについても、10歳のころから、聖職者から習ったギリシア語を用いて、ギリシア人とアラブ人との間に立って通訳として働いていた[黒木1993：203]。さらに、イタリア語の通訳が稀少であることがわかると、この言語を習得すべく、カトリックの聖職者について学んでいる。こうして、16歳の頃までには、アラビア語、ギリシア語、イタリア語、英語、フランス語、アルメニア語、トルコ語を話し、読み書きできるまでになっていた[黒木1993：205]。

他方、ハイヤートは、古銭を商店から買い集め、その中から良質の銀貨を見つけて転売して資本を作り行商人に投資するという経済的行為を行うようになり、後には自身も商売に乗り出していった。ある程度の成功を取

めると、今度は両替商を営み、さらにはダマスクスの大商人とパートナーシップを結び、より大規模な事業を営んだ [黒木1993: 207]。

やがてハイヤートは、その英語力を買われて、イギリス政府の初代シリア総領事の第二通訳²に任命されることとなった(のちに第一通訳に昇格)。この領事館での業務を通じて、ハイヤートはイランのシャーの一族に随行し渡英する機会も得た(この時にはペルシア語をマスターしている) [黒木1993: 214]。

しかし、英国から戻った後は「シリアのためになること」に献身すべく、ハイヤートは通訳の職を辞し、再度渡英して、シリアにおけるキリスト教徒の状況について講演し、啓蒙活動に対する支援を要請するなどして回った。ハイヤートは、シリアとイギリスとの間の商業活動を円滑にし両者の共存を図るべく、プロテスタントの支援により現地代理機関の人材を養成することを最も大きな主張としていた。実際にハイヤートはバイルートで学校を設立している。最後はイギリスに帰化して国籍を取得、パレスチナのヤーファールのイギリス領事に任命され、在職のまま死去した [黒木1993: 219]。

黒木は、ハイヤートの生涯に見られる、言語習得や商業活動を基盤としつつ、次第にシリアをめぐるアイデンティティが形成されていった点に着目している。貨幣価値や商品の値段に関する情報への飽くなき関心が、彼を移動に駆り立て、また、移動は彼の巧みな語学力により容易となり、そこから、教会、伝道団、外国人商人などとのネットワークが築かれた。その際の関係構築のありかたには二者間のそれが強くかかわっており、各地に自らの代理人的な存在を設け、パートナーシップを結んだ商行為に従事していた。黒木は、このような様々な存在の相互の連環に注意を向けている [黒木1993: 220-221]。

こうした知見に立ったうえで、「教会組織のネットワークや、ラバ追いや商人のネットワーク、それらをつなぐ移動手段、多言語環境、多重言語

習得の機会、信用構築が容易な二者関係的な社会関係のあり方、制度として存在した領事通訳職など、これら総体」[黒木1993：221-222]について、黒木は「地域システム」、すなわち、「個人が地域にかかわり、働きかける手段であるとともに、逆にその個人を規定する力をもつもの」[黒木1993：222]ととらえている。そして、ハイヤートは自身のかかわった「地域システム」を通して、異なる「地域システム」に出会う中でアイデンティティの形成・獲得を行ったのではないかと考えている。そのようなアイデンティティ形成の一例として黒木が挙げるのは、ハイヤートが英国滞在時に経験した、イギリスとシリアの経済行為・経済組織の違い——イギリスの会社組織は個人の集合体として、個々人の能力の開花と経済力を結合させることで成り立っているが、シリアではあくまで二者関係のネットワークの中で経済が営まれる——に対する認識である [黒木1993：222]。

黒木によれば、ハイヤートのこうした多種多様な言語、文化に関する経験は、ある部分で彼の「アイデンティティを多重化」[黒木1993：223]させたが、それは言語のようなそもそも多重化可能な側面にとどまり、多重化不可能な宗教はこの限りではない。結果から言えば、ハイヤートは己のギリシア正教徒としての自覚を強く持ち、「ギリシア正教会とプロテスタント教会が連帯してカトリック教会に対抗する図式」[黒木1993：224]を思い描いていた。他方、ハイヤートはイスラームに対してはそれほど敵対的ではなく、むしろ経済活動においていかにハイヤートが多くのもスリム商人と協力関係を結んでいたか、という点に黒木は注意を喚起している [黒木1993：224]。また、ハイヤートが自らの活動に際して「シリアの利益のため」と唱えていたことから、後世のシリア・ナショナリズムやアラブ・ナショナリズムにつながる意識の萌芽を黒木は読み取っている [黒木1993：224]。

総体的に言うなら、この論考は、インフラを含めた物質的な次元から、情報や人間関係まで、多様な存在の相互連環を広く視野に収めたうえで、

ハイヤートという個人が他宗派への対抗関係のもとで自宗派を位置づけた
り、自らの帰属する地理的社会的空間を設定したりという、板垣が「民族
獲得」「民族形成」と表現したところの次元を抽出し、それを「アイデン
ティティ」ととらえている。言い換えれば、アイデンティティには、そこ
からアイデンティティが醸成されてくる母胎とも表現しうる部分があるの
であり、この母胎がどのような構成であり、どのような歴史的過程を経る
かによってアイデンティティのありようも変わる。明示的にこそ述べられ
ていないが、黒木の論述全体からこのような理解を得ることは間違ってい
ないだろう。そして黒木の立場は、板垣の議論の核心をとらえつつも、そ
れを、より日常的な社会的・経済的活動の中でとらえ返す視点を備えてい
るとみなせるのである。

当たり前のことかもしれないが、板垣、黒木ともに、人間相互の関係性
を、具現化した実定的な要素同士の関連性としてとらえている。これは何
も批判的な立場から述べているのではない。とりわけ、書かれた文書をも
とにした黒木の記述は、資料として依拠した文書自体が、言葉として具現
化したものであるため、関係性の記述が実定的なものにもとづき組み立て
られたものとなって当然である。とはいえ、筆者のようにフィールドワー
クから資料を得る場合、具現化され実定的な仕方では得られるという形には
収まりきれない資料に遭遇するというのもまた事実ではある。むしろ従来
的な枠組みには収まりきれない資料を積極的に取り上げることにより、視
野を拡大することをここでは考えたい。

そこで次節では、アイデンティティの母胎をなすレバノン人の振る舞い
には、目に見え言葉になるという具現化を拒む側面があるのではないかと
いう点を、筆者のフィールドワーク資料から示す。多様な存在を知覚的に
把握できる状態で資料化し、その組み合わせから人びとのアイデンティ
ティを抽出するという作業に照らした場合、筆者が指したいのは、アイデ
ンティティにすぐ隣り合うが、しかし、アイデンティティを見えないもの

とするような領域である。それでいて、この領域をもとにしてアイデンティティも生み出される。そのような「場」に目を向けることが以下での作業となる。

4. アイデンティティをとりまく「見えないもの」

ここまで、アイデンティティの概念について、筆者の側で何ら定義することなく、むしろ、「アイデンティティ」をうたう二者の議論を取りあげる仕方で、アイデンティティがどのように論じられているかを例示してきた。

このような措置をとったのは、ひとつにはアイデンティティに関する膨大な議論を包括的に扱うことが本論文の目的ではないからである。もうひとつは、こちらのほうが重要なのだが、「複合アイデンティティ」の議論に見て取れるように、アイデンティティを「同一性」とみなすのであれば、「複合アイデンティティ」の議論は、「同一性」が自在に切り換えられるという、見方によっては「同一性」批判ともとれる次元から議論を始めており、「アイデンティティとは何か」を最初から定義すると、かえって中東地域におけるアイデンティティの特徴がわかりづらくなるためと考えたからである。

実際、アイデンティティをめぐる学説史を参照してみると、「複合アイデンティティ」の議論は、アイデンティティ概念が、次第に流動化、断片化するアイデンティティを概念に包摂する段階に相当する議論のように見える。上野千鶴子は、アイデンティティ概念は、特定の歴史的現象を記述するためのツールとしては概念の耐用年数が切れつつあるのではないかという問題意識から、この概念の歴史化を試みている [上野2005] が、それによれば、アイデンティティ概念を最初に用いたのはフロイト派の社会心理学者エリクソンであり、社会学の分野では、パーソンズ、バーガー、ゴ

フマン、構築主義、バトラー、ホールらの議論が多様な展開を遂げつつ、アイデンティティ概念が用いられてきた。上野によれば、エリクソンの段階では「統合仮説」の側面があり、アイデンティティを確立した人間こそが正常な人間であるという含意があった [上野2005: 8]。上野の学説史的整理を読むと、その後のアイデンティティ概念の議論は、こうした「統合仮説」からの、ある部分での解放が目指されていたことがうかがえる。そのことの表現が、例えばゴフマンによるアイデンティティの管理なる議論であり、構築主義であり、ホールによるポストコロニアル的なアイデンティティ論であった。

このような整理に照らした場合、板垣、黒木ともに、アイデンティティの議論が動態性、複数性を帯びるようになるのと軌を一にした議論を行っていると感じてよいだろう。そうであるがゆえに、既存の価値や規範に対する適応といった視点ではなく、多様な行為・実践の中からアイデンティティが生成される点に二人とも着目していると考えられるのである。そこで筆者はこうした経緯を踏まえたうえで、アイデンティティに隣り合って存在する現象を、フィールドの中から取り上げたい。

一つ目の例は、次のようなものである。筆者が調査地³で、とあるスンナ派イスラーム教徒の若い夫婦の自宅を訪れた際、筆者はこの夫婦とその子どもたちと一緒に、居間でテレビを見ていた。この時は、特に目当ての番組があるというわけでもなく、父親はリモートコントローラーでチャンネルをときどき切りかえていた。そうしているうちに、とあるチャンネルで、ギリシア正教のものと思われる礼拝の様子が映しだされた。それを見た4歳ぐらいの息子がテレビに近づくと、画面を指さしながら「これはキリスト教徒だ *haida masihī*」と筆者に言った。それを見た母親は、すぐさまその子のほうへ寄った。彼女は、いくらか力をこめながら彼の腕をとって、「やめなさい *ayīb*」と言いながら、子供をテレビから引き離した。それから筆者に向かい、険しい表情で、「似たようなものです *mitul ba'da*」

と主張した。筆者は、そのとっさの出来事や母親の剣幕にたいして驚き、何も言わずに彼女の方を見ていた。すると彼女は、「イスラーム教徒とキリスト教徒は、似たようなものです *muslim w masīhī, mitul ba'da*」と強い口調で繰り返した [池田2014：6, 2016：60-61]。

様々なチャンネルの中から、特にキリスト教徒を映した映像が目に入るや、指さしという身振りでもって、イスラーム教徒の幼児から見た異質性が示されたが、母親によって、あたかもそうした異質性は存在しないかのごとくにされていったという例である。この母親の、画面に映し出されたキリスト教徒の映像を指さす子供の手を取り、彼の身体ごとテレビから引き離す様子には、客として訪問していた筆者の前で小さな子の粗相をたしなめるといった礼儀の水準を超えた、恐怖心に近いものが感じられた [池田2016：61]。子どもの無邪気さが反射的な指さし行為となって現れたように、大人の恐怖心は、反射的に子どもの行動、ひいてはその行動が示唆したものを打ち消したのである。これらは、我々/彼らのアイデンティティが強固にある一方で、それを見えなくさせる行為と言える。板垣が「アイデンティティを獲得していく動態」を問題にしたととらえるならば、この町で筆者が目当たりにしたのは、「アイデンティティを(あたかも)なくしていく動態」であると言えよう。

二つ目の例は、次のようなものである。この時は、筆者はギリシア正教徒の女性と話をしていた。彼女は、マロン派のキリスト教徒 (*muwārne*) はイスラーム教徒のように頻りに礼拝をすとか、かれらは今でこそ裕福だがかつては貧しかったということを筆者に対して語っていた。筆者はそれを承けて、そもそもギリシア正教とマロン派の違いは何かと尋ねてみた。すると、「みんな神に由来しているのです *kell min allāh*」という返事をしたときり口をつぐみ、彼女はそれ以上の詳細を語ろうとしなかった [池田2014：6-7, 2016：62]。

当初の彼女の語りの要点は、自分たちギリシア正教徒は、礼拝は日曜し

か行わないのに対して、マロン派は毎日礼拝に行くが、それは丁度、一日に五回礼拝を行うイスラーム教徒のようである、ということであった⁴。つまりこの女性は「マロン派キリスト教徒」という集団概念を主語に立て、かつ、他の宗派との比較について話していたのである。筆者はこの様子を見て、こうして住民自身が宗派間の関係を語る状況であれば、同じように比較の視点を持ち込みながら宗派間の関係について尋ねても大丈夫なのではないかと判断した。それで、マロン派とギリシア正教との違いは何かと尋ねたのである。すると、当初は熱心な様子でマロン派について語っていた女性が、そっけない一言を述べただけで、その後は無表情に口をつぐんでしまった。ひさしの張りだした屋外のスペースでコーヒーを飲みながら雑談をする、そんな穏やかな時間帯の会話だったのだが、話はそれ以上進まなくなってしまったのである [池田2014：6，2016：62]。最初の例と同様、このギリシア正教徒の女性は、アイデンティティを見えないものとさせている。

この二つの事例からは、一方では調査地の住民自身が、ある宗派を別の宗派と対比させ、そのうえで自己の宗派を位置づけるという言動をとることがわかる。これは、複数の宗派が共通の土台の上に載せられて比較される措置を通して、自己や他者のアイデンティティが具現化される過程であると理解できる。この意味において、エスニシティやアイデンティティに関する、何の違和感もない扱われ方であると言えよう。

しかし他方では、当の住民の言動を踏襲するようにして、調査者の側でも同様の過程に参入しようと、宗派のカテゴリを主語にした語りを試みるや、住民との間に緊張感が生まれ、こわばりが生じ、コミュニケーションの円滑さが失われてしまうのである [池田2014：6]。

5. 人びとの内側から出てくるものに目を向ける

前節で取り上げた二つの事例について、筆者はこれを「ある一面では相互に区別されている宗派を、『神』という上位次元を持ち出すことで統合をはかった」という風には考えていない。おそらく、宗教学的にはそのような説明で良いのであろう。マロン派にせよギリシア正教にせよ、ともにキリスト教の中の一宗派であり、また、イスラームがユダヤ教、キリスト教と並ぶ「セム的一神教」であり、これら三者はいずれも「神」を信仰することを考えるならば、「イスラーム教徒とキリスト教徒は、似たようなものです」という発言も、「みんな神に由来しているのです」という発言も、何ら間違いではない。

もし、ある人が宗派的な差異を口にしたのを、こうした上位次元への参照によって覆い隠すことだけが問題なのであれば、それは一種のエチケットとして処理することであるとも考えられる。実際、レバノンの隣国シリアでの経験にもとづいて、社会文化的な違いを前提としつつも、それを覆い包むようなものとして礼儀作法やマナーがあるのではないかという問題提起を谷口淳一が行っている [谷口2013]。ダマスクスで谷口が暮らしていた家に住む別の日本人を、ひとりの若者が訪ねてき、谷口と大家がその若者の相手をして、日本人の帰りを待っていた時のことであった。15分ほど経ったのち、大家はコーヒーを飲むかと若者に勧めた。すると彼は断り、その場を辞したのであった。谷口は、大家は普段はコーヒーを谷口自身に何度も勧めるが、この青年には対応が違い、彼が断わるや、それではと、戸口まで彼を送って行った。谷口はここに着目し、大家がコーヒーを勧めたのは、待っていても仕方がないので帰ってはどうかということを婉曲に伝える作法や社交辞令ではないかととらえている。そのうえで、こうした作法は「多様な職業や宗教などに属す人々が共棲する都市では特に発達す

るのではないか。都市の住民は、さまざまな背景をもつ人々と否応なく付き合っていかなければならない。このような社会で円滑な人間関係が維持されるためには、個々の社会集団を超えて通用する共通の礼儀作法がとりわけ重要になる」[谷口2013: 282; 傍点付加]と述べる。

筆者の拙い要約では伝わりづらいかもしれないが、谷口の記述を読む限り、シリア人のこうしたやりとりは、実に洗練され、スムーズである。しかも、別の脈絡においては、谷口自身が人づきあいの上で、シリア人から見れば粗野な振る舞いをしてしまった時は、こういう時はこうするものだと、シリア人が教示すらしている [谷口2013: 281]。このような条件に支えられているのであれば、これを、都市に住む様々な集団間に共通のエチケットや礼儀作法と表現しても問題ないと思われる。

しかし、筆者の資料において目立つのは、各々の発言に見られる言語行為や、発言を取り巻いて存在する身体的所作、さらには感情の側面である。「イスラーム教徒とキリスト教徒は、似たようなものです」と強い口調で言い、キリスト教徒を指さす子供を体ごとテレビから引き離すということ、当初は熱心にマロン派とギリシア正教の違いを語っていたが、「みんな神に由来しているのです」と言ったきり口をつぐんでしまうということ、こうした、恐れや緊張感とともにつつい取ってしまう言動が、観察者である筆者の前に厳然と現れたのである。差異の外側で差異を取り巻く枠組みをスマートに参照しながら差異を乗り越えるのではなく、むしろ差異をめぐる言動に巻き込まれつつ、反射的、感覚的に差異を打ち消す言動が人の内側から出てくることが、筆者の資料には現れていると言えるのではないか。

6. おわりに

中東および中央アジアの人類学に関する概説的書物の中で、著者のデイ

ル・アイケルマンは、これらの地域に見られる宗教、民族の複雑さについて、その概要を述べたのち、以下のように指摘している。

中央アジアや他の地域において民族のバランスが変化していくことに目を向けるなら、民族・宗教をめぐるアイデンティティ、恐れ、好機の到来がいかに複雑であり、またそれらが変動しつつある経済的・政治的コンテクストの中で維持され、あるいは分節化されるかの様子が見とれるのである。

[Eickelman 2002 : 16 ; 傍点付加]

アイケルマンがここで、アイデンティティを「恐れ」と並置したことが興味深い。アイケルマンは、民族バランスの変化という、マクロなレベルにおける変動が、人びとのアイデンティティの維持や変化、当の集団に対する予期せぬ好機の到来とともに、恐怖感の醸成としても現象すると考えているという風に、この一節からは読み取れる。

本論文が「見えないもの」に着目したのは、決して「見えないもの」を記述すれば充分であるとうたうかのような、客体的・直線的な議論構成を意図してのことではない。「見えないもの」に着目することにより、アイケルマンが恐怖感として見て取ったような、アイデンティティを取り巻く感覚的な側面が、人びとの内側から出てくるものとして我々の視野に入り、それこそが日常生活の基盤としてあり、アイデンティティもこの生活感覚から生ずるような、社会を生み出す場として機能しているのではないかという風に捉えかえす余地が出てくるのである⁵。

謝辞：本論文を執筆する過程で、佐久間寛氏から貴重な御意見を賜った。記して感謝申し上げます。なお、内容に関しての責任がすべて筆者にあることは言うまでもない。

参考文献

- 池田昭光 (2014) 「流れに関する試論——レバノンからの視点」『アジア・アフリカ言語文化研究』87: 5-19。
- (2016) 「流れと顔——レバノンにおける民族誌的研究」博士学位論文, 首都大学東京大学院人文科学研究科。
- 板垣雄三 (1992) 『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』東京: 岩波書店。
- (1985) 「エスニシティをこえて (概念装置としての有効性と問題点)」『教養学科紀要』17: 19-24。
- 上野千鶴子 (2005) 「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子 (編) 『脱アイデンティティ』 pp. 1-41, 東京: 勁草書房。
- 黒木英充 (1993) 「中東の地域システムとアイデンティティ——ある東方キリスト教徒の軌跡を通して」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史 (編) 『アジアから考える [2] ——地域システム』 pp. 189-234, 東京: 東京大学出版会。
- (1997) 「情報をめぐる人的結合と地域——十九世紀前半のシリアにおけるスパイと通訳の軌跡」木村靖二・上田信 (編) 『人と人の地域史』 pp. 206-242, 東京: 山川出版社。
- (2005) 「オスマン帝国における職業的通訳たち」真島一郎 (編) 『だれが世界を翻訳するのか——アジア・アフリカの未来から』 pp. 211-224, 京都: 人文書院。
- 谷口淳一 (2013) 「ダマスクス人の社交作法」黒木英充 (編著) 『シリア・レバノンを知るための64章』 pp. 278-283, 東京: 明石書店。
- ハージ, ガッサン (2007) 「存在論的移動のエスノグラフィ——想像でもなく複数調査地的でもないディアスポラ研究について」伊豫谷登士翁 (編) 『移動から場所を問う——現代移民研究の課題』 pp. 27-49, 東京: 有信堂。
- EICKELMAN, Dale F. (2002) *The Middle East and Central Asia*. Fourth edition. Upper Saddle River, New Jersey: Prentice Hall.
- 1 実際, 「アイデンティティ複合」を論じた論文の一篇は, 初出時には「エスニシティをこえて」[板垣1985] というタイトルが付けられていた。
 - 2 紙幅の都合もあり, ここでは立ち入った説明ができないが, この時代のオスマン帝国における「通訳」なる存在の, 免税特権を始めとする独特の位置づけについては, ここで取り上げた論考のほか, 黒木の他の著作 [黒木1997, 2005] も参照されたい。
 - 3 筆者の調査地は, レバノン共和国ベカー県にあるカップ・イリヤースという田舎町である。人口数を示す厳密な統計は存在しないが, 1万5千人から数万人の規模と考えられる。やはり正確な割合を示すことは難しいが, この町には様々な宗派が混住しており, 人口のおよそ半分がスンナ派イスラーム教徒, 残りがキリスト教徒の諸派(マロン派, ギリシア正教, ギリシア・カトリック, プロテスタント)である。また, ここで引用しているアラビア語は, 筆者がこの調査地で耳にした方言にもとづいている。

したがって、正則的な表現と必ずしも厳密に一致しない部分がある。

- 4 実際、この時の会話は、ちょうど、マロン派の教会が礼拝時刻を告げる鐘を鳴らしているのをきっかけになされたものである。
- 5 議論の位相は異なるが、レバノン移民を対象に、「何か(典型的には経済的利益)のために」移動するのではなく、「自分が前に進んでいる」感覚を持つことの方が、レバノン人の移民現象の核心にあるのではないかと論じた、ガッサン・ハージの「存在論的移動」の議論 [ハージ2007] は、感覚的側面に着目する議論として、広い意味で本論文と問題意識を共有している。